

第1回 第4次日野市農業振興計画策定委員会 要点録

日 時:令和5年5月18日(木) 14時00分～16時00分

場 所:日野市役所5階 503会議室

出席者:9名

※敬称略

番号	氏名	種別	備考
1	旗野 利之	市内農業者①	日野市農業団体連合会会長
2	梅村 桂	市内農業者②	株式会社ネイバースファーム代表取締役
3	馬場 裕真	日野市農業委員会	日野市農業委員会農政部会長
4	野島 智佳子	公募市民①	
5	齊藤 佳花	公募市民②	
6	鎌田 純徳	東京都職員①	東京都農業振興事務所農務課
7	直井 樹	東京都職員②	東京都南多摩農業改良普及センター
8	青木 奈保子	日野市①	日野市産業スポーツ部長
9	吾郷 勝	日野市②	日野市産業スポーツ部都市農業振興課長

欠席者:2名

番号	氏名	種別	備考
1	田倉 勉	JA 職員	東京南農業協同組合 日野七生地区指導経済課長
2	金井 望	東京都農業会議	一般社団法人東京都農業会議業務部

1. 開会

産業スポーツ部長より挨拶

2. 委員自己紹介

出席者自己紹介

委嘱状の交付(机上配布)

3. 委員長・副委員長の互選

以下のとおりに決定

委員長 馬場 裕真

副委員長 野島 智佳子

4. 資料の説明

事務局より資料1～資料11の概要説明

5. 第2章「日野の農業の現状と課題」の検討

資料8 第2章日野の農業の現状と課題(案) ver1.2 を見ながら意見交換

①学校給食について

(委員)

・令和4年度は学校給食の地場産野菜供給率が30%を上回ったが、どのような取り組みをしてこれを達成できたのか？

(委員)

・学校給食に出荷している農家が熱心というものもあるが、学校給食への出荷は直売所と違いビニール袋に入れる手間がなくコンテナで一度に出荷できるというメリットがある。しかし、学校給食は毎日あるので天気に関係なく収穫しないといけないというデメリットもある。

・秋だけで言えば供給率が50%を超えている学校もある。

・配送は今まで農家が直接全校に行っていたが、配送システムが構築されたことにより半数の学校に出荷するだけで良くなった。

(委員)

・昭和58年から学校給食に地場産野菜が使われ始めたので今年で40周年になる。最初は一部の小学校でのみ利用されていたが、今では市内小中学校25校すべてで行われている。

・平成17年から、学校給食については市が契約栽培品目の出荷者に奨励金を出している。これも出荷先として選ばれている要因ではと思っている。

・学校給食の仕入れ価格は市場での流通価格よりも高く、それに奨励金が上乗せされるので、農家がより高値で取引できるようになっている。

・令和3年度の総出荷量は約110トン(野菜のみ約85トン)

(委員)

・東京の農業は農家と消費者の距離が近いので、庭先販売や飲食店等様々な出荷先があるが、学校給食は安定的でロスがない。時期と品目がずれていなければ注文もたくさんくる。

(委員)

・市民アンケートでも学校給食への地場産野菜の供給が評価されている。

(委員)

・私は小中学生の子どもがいるが、学校給食は美味しいと言っている。栄養士も献立の横に産地表示してくれている。いい取組だと思う。

②子どもの農業体験について

(委員)

・市内の農地が多くあるエリアの学校では授業で農業に触れる機会があると聞いた。住宅地エリアの生徒でもそのような機会を提供してほしい。

(委員)

・学校の敷地の花壇を畑にしたり、中学生が農家に職場体験をしたりという事例はある。しかし各学校の先

生の力量差があり、学校によるカリキュラムの差が出来てしまっている。

(委員)

・農業体験を学校主体でやるのではなく PTA 主体でやるというのはどうか。

(委員)

・可能だとは思うが、農地を借りてやる場合は地主の理解を得るのが難しい。

(委員)

・農家の見学だったら対応が出来そうだが、栽培の体験となると農家の負担が大きい。PTA がしっかり畑を管理してくれるのであれば、栽培のアドバイスレベルなら出来ると思う。

(委員)

・土づくり、苗などの準備は農家が行い、草むしりや収穫などは PTA が行うというのは可能かもしれない。

(委員)

・今まで農業に縁のなかった地域の子供たちが体験できるのはとても良いこと。市は土地の問題を解決させよう。

③高校生・大学生へのアプローチについて

(委員)

・食育では小中学生がメインになっていて、高校生・大学生にはあまりアピールできていないと感じる。

(委員)

・私は農学部に進学したが、高校の進路指導の際に担任から心配された。農業のイメージが悪いのかと思うが、日野市は農業に対して積極的に施策を打っているのでイメージを変えたい。

(委員)

・高校生や大学生に農業の発信をしていったら良いのでは。

(事務局)

・大学生はアルバイトをしている人が大半。アルバイトはいろいろな職種でできるということのも魅力だと思うので、選択肢の一つとして農業があってもいいのではないかな。イベントに出店する際の販売要員でもいいし、農業に触れるきっかけを提供する。農業が身近になってほしい。

(委員)

・たしかに、ボランティアやアルバイトをするにも農の学校で1年学んでから、というのはハードルが高い。

(委員)

・アルバイトはインターンのような側面もあるからそれを農業でやるのもいい。

(委員)

・「ボラバイト」というものもある。最低賃金とどのように折り合いをつけているのかは不明だが、無償の援農ボランティアばかりに任せるのも疑問に思うときがある。自分自身インターン生を受け入れているが、インターンを雇用まではいかない簡単で身近な制度として作るのもよいのでは。就活にも使える。

(委員)

・雇用やアルバイトを雇うための資金を東京都から出してもらおうということもありなのでは？無償より有償の方がしっかりやろうと思える。

④女性農業者の活躍推進について

(委員)

・女性農業者の話題が計画案の中では少ない。女性が感じている問題点や課題を反映させるのが良いと思う。

(委員)

・女性農業者というと日野市では女性農業者の会「みちくさ会」がメインになっているが、それとは違う面での言及もほしい。

(委員)

・“家事をする”、“経営をサポートする”よりは経営の主体となっていくようにしてもらいたい。

(委員)

・イメージ戦略も必要。農業者は365日畑に出るイメージがあるが、出産育児を経験する女性にとっては職業選択しづらい。

(委員)

・東京都は育休の支援をやっているが、まだまだ充実しているとは言えない。

(委員)

・私はちょうど0歳と2歳の子育て中だが、奥さんは家事で私は仕事というのが当たり前になってしまっている部分もたしかにある。

(委員)

・市民サポートセンターではファミリーサポートのボランティアで家事やベビーシッターの仕事もしている。そういったものを農家も利用すれば、農作業の人手に女性も加わっていけないのではないか。

(委員)

・私も産休育休を使ってる間の職場には代替職員が来てくれた。農業でもそういうのがいたらいいと思う。

(委員)

・育児に限らず介護のときでもできるような仕組みづくりを考えたい。

⑤援農ボランティアについて

(委員)

・今の援農ボランティアは充実しているが、草むしりや袋詰めなどの簡単な作業が多い。トラクターの運転などの難しい作業もできるような人材がいてほしいという気持ちがある。

(委員)

・援農ボランティアも変革期にきている。一步レベルアップした存在のニーズが農家にはある。

(委員)

・東京都の広域援農ボランティアは日野市ではどれくらいの農家が受け入れているのか。

(委員)

・日野市では2件しかない。都民の広域援農ボランティアの知名度が低いし、ボランティア依頼の登録をしてもボランティアが必ず来るとは限らないのでなかなか浸透しない。

⑥日野市の現状と新規就農者について

(委員)

- ・正直、もう少し頑張れる農家はいると思う。不動産収入があるから農業はほどほどでという人が多い。モチベーションを高めていく方策を考えていきたい。
- ・後継者もちろん必要だが、農外からの新規就農者も担い手の確保として必要。実際に日野市でも新規就農者が増えてきている。

(委員)

- ・私の親しい友人に実家が農家で自分は銀行員という人がいるが、そういう人に農業をやれというのは難しい。しかし、農業をやりたい人に「じゃあすぐにやってくれ」と言うのも、農地を持っていないので貸借が必要になりとてもハードルが高い。
- ・新規就農者が最初に農業をするための作業場などの拠点や機械を確保していけば、新規就農者の参入もしやすいのではないかな。

(委員)

- ・毎回ではないが農業委員会でも農地斡旋の話がでてくる。しかし斡旋するにしても取引価格の規模が億単位なので、取引に至るのが難しいというのが現実。
- ・幸運にも農地貸借ができた新規就農者であっても、貸借期間が10年以上で所有者の同意がないとビニールハウスを建設することは難しい。

(委員)

- ・前回の都市農業シンポジウムでも話があったが、後継者がいない農家の農地で新規就農者に農業を始めさせるというのは行政から提案できるのかな。

(事務局)

- ・農地は家の資産なので、こちらからは言い出しにくい。

(委員)

- ・家族間でも資産の話が出来てないところもあり、仕方なく相続で売る、というのを何度も聞いた。農地の活用法を積極的に知らせていけばいいのかもしれない。

⑦その他

(委員)

- ・若い人同士の出会いがないと思う。コロナ禍でコミュニケーションを取りづらくなった期間から徐々に元通りになりつつあるが、まだ人とコミュニケーションをとる機会を欲している人はいると思う。農作業の忙しくない時期に草取り婚活とかのイベントもいいのでは。話題になりそう。

(委員)

- ・現実的に考えると、収穫体験などのイベントは収穫物がない時期にやると畑が淋しいので、結局忙しい時期にやることになる。ただ、イベントを農家が自分でやるのは大変。関係者間の調整など必要なことが多いので、事務局的な部分をイベント会社やボランティアにやってもらえるといい。
- ・イベントの開催に係る人件費などのソフト面の支援金があるとありがたい。

(委員)

・有償であったらやってくれる人は結構いるのでは。働いてないママ世代とかは能力があるが機会がない人も多い。

6. 構成等、全体への意見出し

意見なし

7. 事務連絡

事務局より連絡

8. 閉会